

ため移動した。40年皖南の新四軍を訪ね、冬に桂林へ移り、短篇「寂寞」長篇「人と土地」等を発表、桂林文芸界抗敵協会理事も務める。41年皖南事件が発生し国民党政府の弾圧が強まると香港に移る。12月太平洋戦争勃発と同時に日本軍の香港占領。42年1月蕭紅の病死後、桂林へ脱出。以後桂林で自伝的長篇「姜步畏家史」の第1部「混沌」、短篇「北望園の春」「老女中」1944年の事件」等を執筆。44年日本軍の桂林進出による西南戦線崩壊のため四川省重慶へ逃れる。四川では鄧都で教育活動に従事していたが、秋に国民党政府の特務に逮捕され重傷を負う。45年春、重慶に戻り「姜步畏家史」第2部「氫氫」を書きあげる。8月15日、日本軍降伏。在四川八路军軍の影響下で周鯨文らと東北文化協会を組織し、46年春、陶行知の社会大学の教員となるが、家族（母と妹）の消息を得て四川を離れる。6月上海に着き神話「藍色の凶們江」ドラマ「五月の丁香」を発表、「蕭紅小伝」を連載する。47年3月東北で民主活動中に再び特務に逮捕され瀋陽に送られる。解放軍の全東北制圧により、南京軍法局監獄に転送、白色テロの恐怖におびえる毎日を送った。49年1月解放軍の北京入城、南下にともない、南京から脱出し香港へ。6月香港から北京に戻り、7月の第1回全国文学芸術工作者代表大会に参加。10月中華人民共和国が成立。冬、山東省済南へ向い水利建設工作に従事、翌年山東省文联副主席となる。短篇「王かあさん」「父娘二人」などはこの時期の生活体験に基づいている。のち北京郊外の農村に転じ、やはりその体験から短篇「北京近郊の月夜」「老魏魏と芳芳」などを生み出す。解放後の

これら一連の作品は、総じて明るい希望に満ちた農村を舞台に、人々が新しい社会に適應してゆく様子を描いており、抗戦末期の作品とはかなり作風の違いを感じさせる。またこの頃から創作活動と平行して古典や金文の研究を始める。58年8月、『大躍進』『人民公社』政策が決定。黒龍江省に「下放」される。短篇「山の購入所」発表。62年北京に戻り、ドラマ「結婚の前」や短篇「草原の上」「白樺の木陰の下」等を発表。66年文化大革命の発生とともに大衆審査を受け、68年まで北京市革命委第2学習班でマルクスレーニン主義や毛沢東思想の再教育を受ける。72年「春秋批注」の初稿完成、76年までに「金文新考」「貨幣集」「兵銘集」「典籍集」など古典や金文に関する成果を次々とあげる。79年10月、第4次文学期代表大会委員及び作家協会理事に選ばれる。現在は北京市前門西大街に居住。

●●訳注●●

- (1) 暗に国民党政府軍の部隊を指すと思われる。西安事件（36年）以後、中国は第2次国共合作で日本軍と戦うことになるが、皖南事件（41年）の武力衝突のように、合作は終始不安定な要素をはらんでいた。
- (2) ここも暗に共産党指揮下の部隊、例えば新四軍などを指すと思われる。中国では、怨霊が人間を身代りに引き込むと再生できるという迷信があった。

(4) 魚名未詳

- (5) 鰱魚は、学名 *Sniperca chuatsi* 体長約60cm、青黄色で不規則な黒色斑紋を持ち、口は大きく下顎が突出している。中国の代表的な淡水魚の一つ（65年新編本『辞海』）。拙訳の「らいぎよ」は便宜的な読み仮名である。

●●解説●●

○「生活の意義」について

原題「生活的意義」。後記によれば、太平洋戦争勃発の直前、41年冬に香港で脱稿、ちようど病床にあった女性作家の蕭紅—翌年1月病死—にこの作品の構想を話し、批評や助言を得たという。

テキストは次の2種類ある。(1)『北望園の春』（46年1月初版、47年8月再版、上海、星群出版公司）所収のもの、(2)『駱賓基小説選』（81年、長沙、湖南人民出版社）所収のもの。今回の翻訳は(2)を底本としたが、(1)に比べ細かい表現でかなり手が加えられている。例えば訳の冒頭8行

目の「我々は40年代の革命部隊だから」という部分は、(1)では「我々は50年代の革命部隊だから」となっている。即ち(1)では、執筆時点が未だ抗日戦争中であることから、用心深く作品の時代設定を50年代という将来にずらしているのだと思われる。また池の中の動物の正体は、「鰱魚」だが、(1)では「鰱魚」つまり泥鰌である。こうした微妙な表現の変更の持つ意味については、いずれ他の場所で改めて論じる予定であるが、ただ作者の次のような反省の弁（81年）がその間の事情を説明しているように思われる。「（「生活の意義」を）今読むと、たとえそれが農村の老婆の封建的な迷信による無知や憐れむべき苦しみに触れていても、後方で学習していた革命部隊の普通の政治生活に対する理解が浅く、調査も行き届かず、筆力の点でもまだ未熟な脆弱さを含んでいた」

○作者駱賓基について

本名は張璞君、1917年吉林省琿春県で生まれる。両親は山東省からの移民で茶の販売で成功したが、31年（満州事変の年）倒産。以後つてを頼って山東、北京、ハルピンなどの学校を転々とし、36年上海に向う。この間北京図書館でチェーホフの小説に親しむ。のちに「チェーホフ略談」（54年）を書くように、このロシアの作家は彼に深い影響を与えた。当時はちようど蕭軍、蕭紅など東北（旧満州）出身の新進作家が上海の文壇でデビューしていた。37年8月上海事変が起こるや、上海青年防護団に参加しながら、茅盾の勧めで速写文学を次々と発表。最初の長篇「大上海の一日」も執筆。11月には戦火の上海を離れ、浙江省東部へ宣伝工作の

「紫色のやつだ。あの日俺が引っかけた、こんなに大きく、こんなに丸い……」

指導員までこの事件に引きつけられてしまった。彼女は断片的な叙述を一つもらさず聞いて回ったが、各人の考えや想像はみな違っていた。

「蟹だよ！」

「蟹がどうして暗紅色なんだ？」

「太陽光線の反射の関係よ」女性指導員が言った。ふと、彼女は目をくりくりと輝かせたかと思うと、眉間に皺を寄せ、この件に関する争いをもう聞きたくないという表情をして言った。「もうそんな事考えるのは止さない」体をひねって白墨で字を一つ書いて言った。「この字は何でした？」

「蟹！」一日中ズボン直している兵隊が言った。

そこでみんな笑い出し、彼自身も間違いを知らながら得意気に笑い出した。

「一字二字、まだあなたはハッキリ読めませんね。どうしてももっと勉強しないのですか？」

「勉強は大切だけど、読めないなあ……」

彼は手で服の襟をつまみ始め、三十過ぎの男が女性の目の前に立って上手く答えられない時によく見せるあの困惑を顔に出していた。しかし彼は地面に座ると、すぐにまた調子に乗って我々の方にアカンベーをし、すばやく片目をつぶって照れ隠しをした。

この日の午後、遂に我々は未完成の網で池の中の神秘の生物をすくいあ

げた。我々は、それが三斤（1.5 kg）以上の鰻魚であるのを発見した時、全員すっかり興冷めになってしまった。その上、ちよūdこの鰻魚をやもめの孫ばあさんの家に送って、彼女の疑いを晴らしてやろうと計画を立てていた時、村の中から葬儀を知らせるドラの音が伝わってきた。その凄切で陰鬱な音色は、我々をしぼし沈黙させた。

「持つて行くか？」一日中ズボン直している兵隊が低い声で言った。

「食べるとでも思ってるのか！」小隊長が言った。

その後はどうなったのか？その後は、我々はまた以前の味気ない生活に戻り、お互い夕方まで祠堂ほくらの入口に座り、一言もしゃべらなかつた。今はもう秋に入っていた。ひよこは既にめん鳥から離れて一人で食べ物をあさり、アヒルはもう彩色の硬い羽根に生え変わっていた。ただ依然として池の中を避け、岸辺をぶらぶら往き来していたが。

いつ出発の命令を受け取るのか、誰にも分らなかつた。毎日夕方まで、秋風が舞いあげるほこりや、落葉：一面の茫茫たるもや、一面の灰色の……もやが、空に広がり漂っているのを眺め続けるのだった。……灰色の……もや……ある者はうたたねし、ある者はズボンをつくろい……。

「一体何だった？ハッキリ見えたか？」

「こんな大きく、丸く、黒いのが、あつという間に糸を切つて、グイグイと、ゆうに十斤（5kg）ほどはあつた」

「あんたたちに粗糸を取つてきてやるう」アヒルの飼主が興味津津で言つた。

完全に打ち融けてしまった。我々は改めて討議し、研究し、論争した。

一日中ズボンを直しているあの兵隊が帰つてきた時、我々は遠くから笑いかけて聞いた。「馬の尿は見つかつたかい？」彼は池の岸まで走つてくるや、四川の兵隊の体に飛びかかり、二人は地面で殴り合いを始めた。互いに笑いながら、転げ回り、我々は手拍子で囃し立て、二人が池の端まで転がってゆくようけしかけた。「いいぞ！こつちへかわせ、やれ、やれ！」

要するに、アヒルの飼主がその日約束通り再び来なくても、我々は非常に愉快だったのだ。就寝後ずっと夜中まで、我々は池の中のものについて議論し続けた。

すると急に一人が地面から跳び起きて、大声でわめいた。「みんな聞いてくれ。俺は小隊長と賭けたで。向うは亀や言うし、俺は八脚魚や。もし亀やったら、俺のこの綿入れを渡す。もし八脚魚やったら、向うはこの冬、単衣で過してもらわねばならん。みんな証人になつてくれよ」

「おい」誰かが暗闇の中で跳び起きて言つた。「それではまだいかん。もし負けて罰をくらうなら、みんなの前でズボンを脱げ」

「賛成！」雷鳴にも似た応答がはじけとび、続いて高ぶつた笑い声が起

こつた。

「俺は蟹だ。もし外れたら、みんなの前で一日中素っ裸で、何も身につけん」あの一日中ズボンを直している兵隊が言つた。

これ以後、我々は毎日池の岸に集まつてはあの神秘的な生物を釣りあげの方法を考えた。たとえ識字の授業を受けていても、この仕事を止めず、魚網を編み続けた。

やもめの孫ばあさんの家の人が、池の前で紙銭を焼いていた。それは若い嫁だった。我々がばあさんの病状を尋ねると、彼女は低い声でこう言つた。「うちには他に人がいないので、人の物をちよつと借りるのは、全部あの姑さんが勝手にやつてることなんです。もし万一何か間違いがあつたら、私たちがどんな気持ちで暮さなければならぬか、分りますか。半月以上も、ずっとぶつぶつと訳の分らないことをしゃべつてばかりいて、何の話もできないんですから」彼女はいきさつを一つ一つ話すごとに涙を流した。元はと言えば、にやにや笑う材料を引き出すために我々は聞いたのだったが、最後にはしばし黯然となり、静まり返つた。まるで孫ばあさんがもう長くないのが確定したかのように思われた。

「あなたたちは識字の授業に入ると、すぐ一緒に固まるのね。まったく子供みたいに隠れて何を遊んでいるの？」ある日、女性指導員が言つた。

「網を編んでるんです、指導員。入口の外の池に何かよく分らない、触ると咬みつく、だいたい色のものがあるんです」小隊長が言つた。

「あの池？あの濁つた池？」

クツという声だけが、恰も誰かが本当にひよこにいたずらしたか、ひよこがいなくなったかと思わせるように響いた。

結局当然のことながら、じいさんは引き返していった。ただちよつと一度振り返って見た。と、彼は何かを見つけて、向きを変え戻って来た。「誰がアヒルの足を切ったんだ？」尋ねながら、池の端に歩いてきた。「ええっ？ 誰がわしのアヒルの足を切ったんだい？」

「池の中の何かか咬みついたんだ。俺たちが石を投げて助けてやらなかりや：」

「何だって？ 池の中に何がいるんだ？」

「俺たちに変な因縁いんねんをつけんてくれよ」さつきアヒルを追いかけていた兵隊が言った。「誰が何と言おうと、俺たちはあんたのアヒルに触つてない。理由もなく何で傷つけたりするもんか」

「改めて聞きますが、あんたたち、一体どういう奴が足を咬み切ったりできるんですかね？」

「咬み切られてはおらんし、血も出とらん。ただ駆けつけるのが遅かったというだけのことだ」小隊長が笑いながら言った。

「切られてないって？ だったらどうしてあんなにびっこをひいて歩いてるんですかね？」じいさんは傷ついたアヒルをきせる煙管で指しながら聞いた。「あんたたち、よく見て下さいよ」

「絶対に切られてへんよ。信じられなかったら、よう見るんやね。俺たちがやったんとは違う。嘘をついても仕方ないんやから」ひようきんな四

川の兵隊が言った。

「見んでも分つとる。びっこをひいて歩いてるか、足に異常ないかぐらいは」

「このじいさんは、どない言うても分らんのかな。切つとらんと言うたら切つとらんのや。まして俺たちがいたずらしたやなんて。そんなに信用できんなら、幾らでも聞いたらええ。昨日の夕方やめめの孫ズンばあさんが池の中の何かに咬まれなかったかどうか？」

「聞かんでも分つとる。池の中に人間を咬むようなもんなんかおらんわ。わしは年柄年中ここで見ているが、一匹の魚もおらん！ どっちにしるお前さんたちが何かのやり方でアヒルの足を切ったんだ」

その時一人の兵隊が叫び声をあげた。そちらを振り向くと、池の水面に大きな影が現われ、すぐに沈み消えていった。何と兵隊の垂らしていた釣糸を引きちぎっていったのだ。ただ一瞬のことで、誰もその正確な色や形をしつかり見た者はいなかった。紫色だと言う者もいたし、赤色だと言う者もいた。大蟹だ、海狗あうとせいだと言う者もあり、小隊長はと言えば、依然として亀だと主張し、あの四川の兵隊の解説では、間違はなく八脚魚はつぱうぎょということだった。私はと言え、その場で口にこそ出さなかったが、確か水獺かわうそに似たもののような気がした。

今度のはあのアヒルの飼主まで驚いた。それまでの争いを完全に忘れたかのように、大声で釣糸を垂れていた兵隊に尋ねた。「どんな釣糸を使つてんだ！ あれではだめなんだ。もっと丈夫なのを捜さんことには役に立たん。

女性指導員はすぐ手を止め、身をよじって尋ねた。「笑ったのは誰？」半分に分かれた白墨が彼女の柔かい白い指の中で回転していた。彼女の口調も顔色もすべて冷静だった。だがこの異常な冷静ぶりが、却って我々に厳粛な気持ちを起こさせた。ゆうに三分間ほど、彼女は指で白墨をひねりながら、静かに我々を見つめていた。我々はみなキョロキョロと自分の回りを盗み見し、どういうわけか小隊長の方へ目が集中した。そこで遂に小隊長は立ちあがった。「私だ、指導員」微笑が彼女の唇から漏れた。「あなたたちは今日何を喜んでるの？みんな二十何歳にもなって、まるでまだ子供みたくいに。本当に……。座りなさい」

授業が終るや、我々は大声で騒ぎ始めた。みんな池の岸に集まり、ある者は池の中へアヒルを追い立て、ある者は釣竿を作り、必ず釣り上げてみせると言うのだった。あのひょうきんな四川の兵隊は、小隊長と論争だった。

「そんなアホな。あんたに言わせたら、この世の中に人を食う大亀がおることになる。じや、やっぱり八脚魚（ヤ）のようなものに違いない」

「落ち着けよ。俺は亀だと言ってるんだ。ただの亀だ」小隊長は相手が激昂すればするほどいよいよ沈着さを發揮し、腕を組みながら、目を相手から逸らして言った。

「何か賭けてみるつもりは？」

「お前とは賭けんが、要するに八脚魚じゃない」

「絶対に亀やない。砂洲もないのどこから亀が来れるのか！」四川の

兵隊は顔中に憤りをみなぎらせて言った。「亀って、あんたに言わせたら、亀が木に登ることになる」

「お前とは口論せん。もう止めだ」

「誰がいつまでもあんたと口論しますかいな」

「もう止めとけ！」他の兵隊がなだめて言った。「みんないろいろ考えて面白がってるのに過ぎんのさ」

たまたまこの時、祠堂（ほじら）の後方の家の主人がやって来て大声で言った。「あんたたち、うちのアヒルを追いかけ回さんでくれ」そのじいさんは手に煙管（る）を持ったまま、まるで音楽家が指揮棒を振るように、我々を指して尋ねた。「あんたたちはどうして追っかけるんかね？」

その時までアヒルを追っていた兵隊は、腰をかがめて土塊（つちくれ）を拾い池に投げ、周りを走り回っているアヒルにまるで関心がないと言わんばかりに、何事もなく平然とした様子を装（よそお）っていた。しかしめん鳥は、ちょうど追い散らされたひよこを呼び戻そうとするかの如く、相変らずクツクツと高く鳴きながら、羽を伸ばし、トコトコとあちこち走り回っていた。実際にはひよこもアヒルの子も全員その時には周りに集まっていたのだが。

我々はみな立つ者は立ち、うずくまる者はうずくまり、誰も声を出さなかった。というのも、そのじいさんに反発していたからではなく、ひょうきんな四川の兵隊が小隊長と口論していたからだ。彼ら二人は依然肩を並べるように一緒に立つ立っていた。だが顔に余り忿満が残っていないというだけのことだった。だからこの時、ただめん鳥の虚勢を張ったクツ

げて見ると、三羽のアヒルが驚いて岸の方へ疾走し、一羽が中央で施回していた。我々がすぐにその付近に石を投げつけると、アヒルの体が一度沈み、小さな口ばしが僅かに残ったかと思うと、水面に大きな波紋がまき起こり、アヒルは二度高く鳴きながら浮上し、ぐるりと一回転するや、直ちに向う岸へと泳ぎ去って行った。他の三羽が祠堂ほくらの入口近くの岸で一斉に呼んでいたにもかかわらず。

我々はこの時断定した。池の中には奇怪な水棲動物がいるのだと。あのアヒルの子が歩いている姿は、どう見ても尋常ではない。我々は取り囲んで攔まえ、よつてたかつて足の傷跡を調べた。誰か知らないが、これは蛇の咬んだ跡じゃないかと言ったので、攔んでいた兵隊は急いで放り投げ、思わず叫び声をあげ、一瞬真つ蒼な顔になった。我々が大笑いすると、彼はボンヤリした目をしばたき、つられて笑った。「びっくりしたなあ、本当に。もし毒蛇だったら、俺まで毒にやられるのか？」

それは他でもなく一日中ズボンをつくるっている兵隊だった。我々は声を揃えて言った。「きっとそうだぞ」

「絶対に毒にやられるぞ。きっとなもんか。きっとやない、絶対や」ひょうきんな四川の兵隊が言った。「お前まだここで平気な顔してつっ立っているけど、早く馬の尿を捜して洗った方がええ。それも牝馬の尿や。もし子供を生んだ奴やったら効かん。牡に近づいたらん牝馬の尿に限る。行かんのか？俺が真面目に言ってるのに、信じんのか？まあそんならお前の勝手や。みんな、あいつの手に触ったらあかんで。もし毒蛇やったら今夜に

もすぐ回ってくるし、そうやなかったら当然ようなる筈や」そこで、我々はもしひよつとしてあれが本当に毒蛇で、そのうえ彼があのアヒルの子の傷ついた足を長い時間もて遊んでいたのだったら、今のうちに予防し安全を計った方がよい、何もみすみす自分の手を腐らせることはない、と彼に忠告した。

彼は終始頭を振って微笑していた。ちょうど子供が、誰かに欺されるのを見破っている時見せる微笑と同じだった。しかし彼の目は逆に我々の顔色を注意深く観察する光を放っていた。明らかに彼はまだ自信がなく、我々の表情の中に助けを求めねばならなかった。しかし我々も、彼の頑迷さに対し憐れみの表情を示したので、最後には二時間の外出許可を願い出て、八里（4 km）離れた診療所へ医者に診てもらいに出かけた。もう手のひらに若干の痺れを感じたためだった。

一時の識字の授業に、我々はみな喜々としていた。だから女性指導員が黒板に向って字を書いている時、不意に我々の方を振り向いて、いぶかし気な目つきで、「あなたたち今日はどうしたの？誰も彼も春の燕みたいに、ふむ」と、一度ならず注意したのだった。だが誰も内心の秘密を敢えてしゃべろうとせず、そのつど本で顔を隠すのだった。あのひょうきんな兵隊は、隙を見て私に向って舌を出しアカンベーさえた。

「お前はあんな難しいことを言うべきじゃなかったよ。もし馬の尿でちよいと手を洗え、ぐらいで止めとけば、あいつもすんなり信じたろうに」誰か分らないがヒツヒツと笑い出した。

したり、もはや食事班の作る粗末な献立を咎めることなく、飯や汁が冷えたと言つて炊事夫に文句をつけることも忘れ、全員が揃つて愉快だった。

夜には暗闇の中でお化けに関する由来やうわさをしゃべつていて、消灯後長い時間経っているからと、三度も小隊長に談話と喫煙の禁止を言い渡された。それでも我々は相変わらず声をひそめておしゃべりを止めなかった。

我々は全員その池に対し興味をいだいた。神秘的になればなるほど、魅惑も増す。翌日起床するや、我々は老婆が洗濯していた石盤に駆けつけ、うずくまつて顔を洗つた。わざわざ手ぬぐいで池の中の水をかき回し、更に腕を水の中に入れたりしていると、例のひょうきんな四川の兵隊が、二度三度驚きの声をあげ、間違ひなく何かが彼の手ぬぐいを引っ張るのを感じた、と言うのだった。だが他の者が立ち止まり、足元に近寄つて見ても、手ぬぐいに一度も何の特別の動きもなく、嘘をついているのは明らかだった。けれどもその叫び声のたびにいつい何度も欺されるのだった。

この日の天気は大変よく、空中は澄み渡り、ひとひらの雲もなかった。到る所に温和な日差しが溢れていた。村の中でこの絶好の天気をとらえて洗濯しない者がいようか。日の出と共に、池の岸には女たちが一列に並び、木の棒で服を叩き、その無秩序な音は、ずっと遠くから聞いていると、まるでリズムカルな心地よい音楽のようだった。四羽のアヒルの子まで殊更に上気嫌で、得意そうに尾を振り、池の真中まで遊びに行ったり、岸边に流れ着いたりしていた。鳴き声が絶え間なかった。初め我々は、洗濯している女たちに挨拶しながら、昨日の夕方お化けに咬まれた老婆の帰宅後

の様子を尋ね、続いて顔を引き締めおごそかに、もうここでは洗濯をしてはいけない、と忠告した。ひょうきんな四川の兵隊は、「ほんま、この池は怪しいで。もしここで変な目に遇うたりしたら割が合はん」とさえ言った。

一人の澄んだ声の主婦かみさんが言った。「兵隊さんたちは冗談だと思ふかも知れないけど、ここは本当に怪しいのよ」彼女は振り向いて連れの一人に言った。「ほら憶えてる？大栓家の嫁シヤンがここで身投げしたでしょ」それから我々に言った。「あの怨霊が身代りを求めているのよ。昨夜やもめの孫スズメばあさんが自分からこう言うの。大栓家の嫁シヤンが生きてた時、彼女から塩を半斤(250g)と卵二個を借りてそのままになっていた。所が嫁が身投げをしたので、代りに姑しゅうふが返済を求めたが、ばあさんは返したと言ひ張つたの。これは全部孫スズメばあさんが昨夜自分から白状したのよ。返した方がよくないかしら？」

「もう止めてよ。人をおどして」連れが言った。

「あたしたちが何をこわがることがあるの？品行方正なのに、まさか怨霊があと二人も身代りをとるなんてバカバカしい」

ちょうどこの時、小隊長が体操を召集した。後方の峰の上のもやが、こちらの広場の上に広がり、次第に漂い流れ、池の上の蒸気と一体になって凝結した。我々は麦打場で体操をしながら、池のほとりから聞こえてくる洗濯の女たちの棒を叩く音に、ずっと耳を傾けていた。

朝食後、我々はまた池の端に集まった。その時、水面には四羽のアヒルの子が残っているだけだった。我々がどのように水中のあの神秘的な生物を釣りあげようか研究していた時、突然アヒルの悲鳴が聞こえた。頭をあ

た。

「お化け？」

「お化け！」

「どこに？」この瞬間我々は笑わなかった。確かに幽霊が真近かにひそんでいるような戦慄を感じとったからだ。だが老婆が池の方へ手を動かし、我々は初めて笑い出した。一分前の緊張した感覚がすべて消し飛んでしまった。一日中ズボンをつくるっている兵隊が、ひととき大きな声で笑った。「ははっ、男のお化けか？女のお化けか？」

「何が可笑しいのだ？」小隊長が厳しい顔付きで我々に言い、うつむいて老婆に尋ねた。「目がくらんだのだろうか。明るいうちからお化けだなんて」

「……お化けが指を咬んだ……」彼女は口ごもりながら独り言のように言った。

「本当だ。見ろ、指の先が赤いぞ」ズボン直しの兵隊が、彼女の手を握んで我々に見せた。もうその時、我々は彼女を助け起こしていた。小隊長は背中の砂を払ってやりながら言った。「ばあさん、あんたは何か他のものに咬まれたのだよ。心配しなくてもいい、送ってやるから。明るいのお化けなんかいないよ」

「なんでお化けがおらんと言えるんだ？」あの一番ひょうきんな兵隊が真面目くさって老婆に言った。「うちの親戚に洗濯をしてお化けに一口咬みつかれて死んだのがおる。河におっただけで身代りにつかまってしまったと、死ぬ間際に言うとした……」

「こいつのでたらめなんか聞かなくてもいい。ばあさん、俺たちが送ってやろう」

「なんででたらめなもんか！ほんまや。うちの親戚は牛買いで年中ほかを回つとるが、お化けに咬まれたのは、いまましいが俺の叔母なんだ。俺はずっと看病したんだ。指先を見せてくれ。お化けに咬まれたかどうか診てやる」彼は老婆の手を取るや否や言った。「ほんまや。ほんまのお化けの跡や」そのうえ最大級の憐れみの表情を示したので、老婆は一層おろろし、小隊長の方をちらつと見、慌てて逃げるように一目散に村の方へ駆け出した。そのひょうきんな兵隊は、更に後を追いかけて何か言おうとしたが、小隊長に阻まれた。「どうしたんだ、ばあさん」

とうとう我々は一斉に笑い出し、そのひょうきん者は、とりわけ得意満面であった。続いて我々は論争を始めた。ある者は亀だと言うし、ある者は水獺かわうそだと言う。私は北国の人間だから、水獺かわうそが寒帯動物で、温帯の、しかも淀んだ池になぞ絶対に来る筈がないのを知っていた。ただ例のひょうきんな兵隊は四川省の人間で、彼は四川にも確かに水獺かわうそ—南方系の水獺かわうそ—がいると言うのだが。

この日一日は、炊事夫の飯を運んでくるのが大そう早く、その上ひどく飯がおいしく感じられた。というのも、老婆がお化けに咬まれた話題が、まるで美味な焼肉のように作用したからだ。ズボンを直してばかりいる兵隊は、再三にわたって老婆が手足をバタバタさせたしぐさを真似て、そのうえ口を震わせながらうめいて見せたものだから、我々は笑ったり、論争

毎日外股で歩いて我々に文字を教えに来る女性指導員は、帰り際にこう言う。「あなたたち暇があるのにどうして字を憶えないの！」

「憶えろって？」一日中ズボンを通して兵隊が言った。「俺たちはいつも本を手から離さないさ。でも読めないのだからどうしようもない」

我々は彼女に言葉を差し挿む余地を与えないため、彼女の目の前では手にもいつも識字読本を持っていた。人間、誰でも面子うわべをとりつくろおうとするものだ。彼女が行ってしまったや、本はパラパラとむしろの上に落ち、たとえ手の中にまだ握られていても、もしあなたが驚かさなければ、一服する間に、たちまちスースーといびきをたて始めたに違いない。

「いつ出発するのか？俺たちをここで飼殺しにするつもりなのか？」

「知るものか」

「どうして今日の飯はこんなに遅いんだ！」

「腹を引っ込めて待てよ。どうせ仕事はないのだから」

これが我々のいつも交わす会話だった。

ある日、飯を終えて我々はまた祠堂ほくらの入口に座っていた。実の所ここに座っていても、境内にいるのに比べ格別面白いということはなかった。ただ広々とした空、一面に実った水田、何羽かの鳥、二三頭の水牛が見渡せて、いくらか軽やかな気分に入るといふだけのことには過ぎない。ちょうど夏の終わりの夕暮れ時、暑くも寒くもなく、池の上には燕や蠅が飛びかっているのが見えた。一群のひよここと四羽のアヒルの子がピーピー鳴きながらめん鳥を追いかけていた。それが静寂な空の下で唯一の音だった。あと

は一人の老婆が洗濯をしている水の音だけだった。

池の周囲には、ただ彼女が一人いるだけだった。両膝を石盤につき、体を曲げ、時々洗濯物を池の中に浸してゆすつたり、石盤に引き上げて揉もんだりしていた。我々はみな彼女を眺めながらも、一方では誰も目に止めてないようにも見えた。いつもの調子で、我々はてんでに座った。まるで一度腰をおろすと日が暮れるまでずっとそこで、ひたすら飯を食べ終え眠りにつくのを待つかのように。

その時、我々は突然洗濯の老婆が鋭い叫び声をあげるのをはっきり聞いた。すぐに立ちあがり、みんな驚いて彼女の方を見ると、うずくまるように跪くように、両手を地面に突っ張り、立とうと思っても膝が震えて立ちあがれず、口の中でうめいているのだった。ちょうど我々が日頃、不意に獐猛な犬に出くわすと、咬みつかれなくても驚いて跳びさがり、そのあと喉の中で震え声が出てくる状態と同じだった。そこで我々はバラバラと駆け寄った。どの顔もみな緊張していた。

彼女は既に石盤の上にあお向けに倒れ、目は上空を眺めていた。その目は意識がまだ恐怖のさ中にあることを示していた。手足は震え、顔面は蒼白。

「どうしたんだ」

「テンカンに違いない」

彼女は相変らず上空をずっと眺めたまま、恐怖に満ちたうめき声をあげていた。その声の中に我々はひと言「鬼クイ(お化け)」と、はっきりと聞い

生活の意義

駱賓基作

岡本不二明 訳

我々は全部で九人で前線から撤退してきた。後方へ移動し休養する、と言うのだが、いつ再び出発できるのか、誰も知らなかった。我々のような銃を手にしてきたがさつな連中が、ひとたび抗日戦線から離脱するとなれば、毎日をどのようにかみしめて送ることになるか、あなたに分るでしょうか。

他の部隊では、人数を集めて扑克で遊んだり、牌九で賭けたり、さもなくば女を捜したりしたかも知れない。しかし我々はそうしたことはできなかった。我々は40年代の革命部隊だから、女たちを見ると、どうしても几帳面に節度を守るのだった。我々の部隊の兵隊は、敵の大包围にあうと、村の女たちに自分らの亭主―即ちその土地の良民―だと証言してもらうため、つまりは節度を守るのだった。

我々は、その入口に大きな汚い池があり、村の前にポツンと立つ祠堂に住んだ。村の各家のゴミは、すべてこの池に放り込まれ、また水牛の水浴場にもなっていた。いつも日の暮れる頃、ここで何頭かの水牛の角が水面からのぞいているのだった。最初のうち我々は祠堂の入口に座り池の方を向きながら世間話をしていた。ある者は石の階段にうずくまり、ある者は

ペンキの剥げ落ちた廊柱を背にして座った。中でも一番のひょうきん者は、いつも笛を吹く牧童よろしく、デコボコした狛犬の背中に横座りになるのが常で、時々片足を狛犬の頭にのせさえた。話すことと言えば、自分がある時ある場所で出会った絶世の娼婦のことだったり、でなければ有名なある部隊の誰かの往年の恋愛話だったりした。そして一通りそれらの物語りも話し終わると、誰かが走五道をしようと提案し、少しすると、それも飽きてしまうのだった。となると、我々は急にばらばらになり始める。ある者は一日中ズボンをつくろい、ある者は膝をかかえて背を向けて居眠りし、またある者は寝ころがって絶えず低い声で流行歌を口づさむ。お互い顔を合わせても挨拶もせず、各人各様で、たとえものを言うにしても、決まってこんな風に言うのだった。「今日はなぜこんなに飯が遅いのだ！」聞く方は返事をあてにしているわけではなく、答える方も「なぜか分るものか」と言えば、話が終りになるのだった。本当のことを言えば、四六時中一緒にいて、仕事もないから、話を始めると切りがなくなるからだった。実際は、決して仕事がなかったわけではない。我々には毎朝の体操や識字（文字学習）の授業、グループ討論などがあった。しかしこれらはさっぱり頭に入らず、小隊長の命令で池のゴミ掃除に張り切る方がまだ多かった。一日、我々は腕まくりをしてきれいに片付けると、もう次の日には別の仕事が見つからず、池の周囲の石まで全部拾い集めてしまった。そうなるもまた以前の生活に戻り、居眠りは居眠り、ズボン直しはズボン直し、一日中誰もひと言もふた言もしやべらなくなるのだった。